

# まりことさかな

## あるいは恋人が魚になったときの調理法

大村伸一

まりこが目覚めるとまだ夜は続いていた。暗闇の中にはいつもと同じ部屋がある。西の壁の大きな窓から入って来た星明りが、部屋の中の形をぼんやりと見せている。ベッドは温かくシーツに包まれた身体は温かく隣には水男が眠っている。シーツはまりこと水男を覆ってもたつぷりと余っている。水男を覆うシーツは少しも動いていないけれど、水男の寝息は聞こえる。シーツに潜り込み、手を伸ばして水男に触れようとする。水男の背中に触れるとざらざらして指先がしびれたようになる。もっと手を伸ばし水男の腕に触れると水男の腕はとても冷たくてまりこは驚く。その水男の腕は濡れていてまりこの指にはどろりとした液体がつき、まりこの身体もその指先からひんやりとしてくる。指についた液体のにおいを嗅いでみると何かは分からないが懐かしくなった。水男の汗のにおいはセックスのにおいがするはずだから、それは水男の汗ではないと思った。冷たい液体はすでにシーツに染み込んでいて、水男の身体をさぐるまりこの手の甲にその濡れたシーツが張り付いてくる。糊をしみこませたように厚みを増し重くなったシーツは手の甲から離れない。水男の身体を揺すぶって早く起きてと言う。

「ねえ。ねえ」

水男は少しも気づかない。まりこはベッドの上に座り込みシーツを剥がそうとする。窓の外はまだ暗い。水男の身体の一部になったように張り付いたシーツは重く、座ったままでひっぱっても水男の身体によけいにからみつくだけだ。まりこはベッドの上に立ってシーツをひきはがす。力をこめて重いシーツをひっぱりつづけた。少しずつシーツはほどけて、やがて水男の身体がシーツの下から現れた。

「どうしたの」

思わずまりこは声を出すけれど水男には何も聞こえないのか動かない。暗がりの中ではっきりとは見えないけれど、水男の身体は昨日の夜までの形とは違って腕の影がなく腰のくびれはなく、暗がりの中でそれはまるで大きな魚のように見える。それでもその魚のようなものは、姿が変わっても水男だった。息をする音が闇の中でかすかに聞こえた。まりこはおずおずと手を伸ばしお腹のあたりに触れてみる。

「あっ」

鋭い刃物で指を切ったように感じて、まりこは腕をひっこめた。痛む指を舐めてみると、自

分の血の塩っぱい味がした。水男魚のお腹のあたりに顔を近づけて確かめると腹一面を鱗が覆っているようだ。鱗に触れて指が切れてしまったのだろう。腹だけでなく腰もお尻も背中も身体中を鱗がびっしりと覆っていた。

「ねえ。どうしたの」

まりこは何を言えばいいのか分からなかったが、水男に起きてほしくて言葉をかけつづけた。胸のほうからお腹のほうへと鱗の上に指を這わせれば指が切れることなどなく、水男の身体がくすぐったそうに揺れた。

「起きてるの」

まりこは願いをこめてそう尋ねたが、水男は言葉には反応しない。呼吸の音だけが聞こえる。水男の顔を見たくて背中から顔を覗き込もうとすると、首の付け根で大きな鰓が開いたり閉じたりしていた。鰓が開いてスーといい、閉じてパタンブーと続く。スーパタンブー。スーパタンブー。呼吸が続いている。星明りでははっきり見えはしないけれど、水男の顔はもう魚の顔なのだろう。硬い骨と細かい鱗が昨日までの水男と違う顔を形作り、瞼のない目で窓を見ながら眠っている。

陸上では魚は息ができないはずなのに、眠っている間だけ水男は息ができるのかしら。目覚めれば水男は息ができずに苦しむはずだから、海に連れていかなきゃ。水男を海に連れていかなきゃ。そうつぶやきながら、まりこはベッドの上に立って、窓から海の方角を見た。まだ暗い夜の中を、ぼつりぼつりと常夜灯がともり、その光に沿って海まで国道が続いている。車は夜は走っていないから、海辺までは歩いて行かなくちゃいけない。まりこはシーツをすっかり剥がすと、水男の身体に腕を回して抱き上げた。シーツにくるんだほうがいいかしら。でもシーツをまとった魚なんて見た事がない。そう考えて腕に力をこめる。魚になった水男は思ったよりも軽く、抱きしめればきつと運んでいけると思った。

水男の右側を自分の体にピッタリくっつけて、魚の胴体に腕を回して、水男の向こう側で両手を組んだ。水男の重みで鱗が腕に押し付けられるから、腕には魚のしるしが残るだろうとまりこは思った。それでももう一度力をこめて水男の身体を抱きしめた。それからベッドを降りて部屋を出た。水男の尾びれは床にこすれてカーペットを濡らし、床を濡らしてまりここと水男の跡を部屋に残した。部屋を出て廊下を突き当たりまで歩いてエレベーターに乗って一階で降りたら家の外には国道が通っている。五十メートルごとに常夜灯がともっていて、どこまでも灯りは続いていた。

「もうすこしだからね」

水男のまぶたのない目は夢を見て眼球がくるくると動いている。まりこの言葉を聞いているのか何も聞いていないのか分からない。国道は闇を吸い込んで真っ黒のアスファルトで舗装されている。まりこの裸足の左足のかかとに小さな石が食い込む。両手が塞がっているのでは小石を取ることもできない。つま先から道路に足を着けるようにして踵は地面に当たたら

ないように歩く。それでも足の裏はすぐに真っ黒になるだろう。右足の親指の付け根に尖ったガラスが刺さる。まりこが痛みでびくっとすると水男の身体もびくっとする。水男がそれ以上驚かないように、まりこは痛みなど知らないふりをして、一步一步歩き続ける。水男の太い尾びれはアスファルトにこすれてすぐにポロポロになるだろう。

「早く海にいかなくちゃ」

まりこはささやく。

国道はガラガラしていて、まりこの柔らかい足はすぐに傷だらけになり、その血が道に跡を作った。水男の尻尾はすぐに鱗が落ちて肉がこそげて、その血が道に跡を作った。その跡を振り返る暇はなくてまりこは常夜灯の光をたどって国道をどこまでも歩いた。水男の重さでまりこの腕に深く鱗が食い込んだ。痛いけど、水男が悲しまないように、まりこは黙ってただ水男の身体をもっと強く抱きしめた。もっと強く抱きしめると、鱗ももっと深く腕に食い込んだ。海はどこにあるのかしら。どれだけ歩いても海にはたどり着かなかった。

「油籤三丁目」

「壺が浦出町」

「浅腰二丁目」

「砂歩き針町」

「海節町」

バス停の名前は聞いた事のない町ばかりで、バス停の前に着くたびにまりこは腕からすべり落ちそうになる魚の身体を、はずみをつけて抱き直す。大きな鱗にえぐられてもう胸はあばら骨があらわになっている。ひらきっぱなしの鰓がまりこの首に突き刺さり、首から出た血は背中から垂れてお尻を伝って足もとに滴る。海がどうしてこんなに遠いのかしら。水男となら家を出るといつもすぐそこに砂浜があったのに。国道を歩いて来たのが間違いだったのかしら。それとも、どこかで道を間違えたのかしら。ときどき鰓をばたつかせて息を継ぐ水男をまりこはそのたびに強く抱きしめる。

それでも聞こえている。遠いけれど波の音は聞こえている。ずり落ちかけた水男を抱え直し、水男の左側を自分の身体にピッタリくっつけて、魚の胴体に腕を回して、まりこは水男の向こう側で両手を組んだ。

「波の音がするね」

まりこがそうささやくと、水男は大きな口を空に向けたまま開いて閉じた。きっと、波の音がするねと答えてくれたのだろう。水男の鱗は、まりこのあばら骨の内側に突き刺さっていた。まりこのお腹に突き刺さっていた。まりこの頬の肉をそいでいた。水男の鱗はまりこを切り裂き、それでもまりこは腕の力をゆるめなかった。

「もうすぐ海だからね」

そう言って足を踏み出そうとしたとき、もう道はなかった。。

こんなところで国道が終わっているとは思わなかった。灯の真下に真っ黒で大きな穴が開いていて、バス停にはこう書いてあった。

「国道の終わり海のはじまり」

目の前の地面はその場所で真っ黒な穴に変わっていた。あまりにも暗くて黒くて、それが穴なのかさえ分からない。すべての地面がそこで終わっているようだった。ずっと右のほうどこまでも何もないようだった。ずっと左のほうどこまでも何もないようだった。そのくせ波の音はその闇の下のほうから聞こえている。きっとそこには海があるのだろうけれど、それが本当に、あのよく知っている海なのかどうかは分からない。もしかすると、海の真似をした何か黒くて果てのないものかもしれない。まりこはすこし怖くなって水男の身体をまた抱きよせた。

すると水男は魚は急にあばれだし、抱きしめられるのはもううんざりだ。抱かれるのには飽き飽きした。これでお別れだ。おしまいだ。というように身体をくねらせ、頭をふって、まりこの腕から逃れようとしはじめた。ベッドではあんなに小さかったお魚が、この場所ではまりこの倍ほどもある身体になって、力づくで逃げようとした。

あまりにも強い力であばれるので、まりこはとうとう耐えられずに腕を離してしまう。魚は一瞬でまりこの身体をはねとばし、そして何も無い地面の下に飛び込んでいった。落ちていった。そこに海があったのかどうか。そこに波があったのかどうか。まりこは耳をすましていたけれど、何の音もしなかった。

まりこは地面に這いつくばって、地面の下を覗き込んだ。それでも何も見えなかった。朝はいつまでも来なかった。国道を走る車はずっとなかった。